大無量寿経異本対照私考（三）

――省略簡素化の例証――

宮地廓慧

一　論点

本誌前巻（20の2）の同題の拙論最後の部分で、七種異本中『厳経』が最新に近いとみる見解の根拠の一つとした〈省略簡素化〉という点について、紙数の都合上、原文についての証明を割愛しておいたので、ここにそれを補足したいと思う次第である。

〈省略簡素化〉は、後期五本のすべてに互つてみられる、共通の傾向のようである。このことを証明するために、一例を36咸同一類・44虚無之身・45殊好無比の部分（〝乞人帝王喩〟の出る一段。番号・項目名は前号対照表Ⅰによる）にとってみよう。

二　第一例

Ⅱ（44虚無之身）の一段は、浄土往生の諸天人等がすべて蓮華化生で、乳養の要なく、身体は「非天非人」で「自然虚無の身体」を受けて、「甚だ殊好無比」なることを述べている。そしてこの「殊好無比」の説明として次のⅢ（45殊好無比）が出るのである。

ところで、寿経本の編者は、化生者の「非天非人」を述べるためには、浄土の無差別相を前提とするを適当と考えたところから、大阿本・覚経本では遙か前に出ていたⅠ（36咸同一類）をⅡの直前に移すことによつて、叙述に論理性を与えようとしたわけである。

しかし次の如来会本の編者は、この「非天非人」の意味を正しく理解せしめるには、「自然虚無之身・無極之体」という表現が、却つて誤解を招くおそれありと考えてこれを削除し、「無差別相」と「順余方」との二点だけに止めたのであろう。梵蔵本はそれをそのまま継承している。

しかるに厳経本に至ると、これら二点をも削除してしまっ

第一例〔36・咸同一類・44虚無之身・45殊好無比の諸項〕　（改行・傍点等私に施す）

覚経	寿経	如来会	梵蔵本	厳経
I 〔正12283a〕同一種類無有異人也、其諸菩薩阿羅漢面目皆端正、清潔絶好、悉同一色、無有偏醜悪者、……	〔正12271a〕次於無為泥洹之道、其諸声聞菩薩人天、智慧高明神通洞達、咸同一類、形無異状、但因順余方故有人天之名、顔貌端正、超世希有、容色微妙、非天非人、皆受自然虚無之身無極之体	〔正1197b〕復次阿難極楽国土、所有衆生無差別相、順余方俗有天人名	〔荻原訳p.95〕又彼世界には世俗の言説を以て天と人と数計する外に、天と人との異あることなし	
II 〔正12284a〕其身体者、亦非世間人之身体也、亦非天上人之身体也、皆積衆善之徳、悉受自然虚無之身体甚殊好無比	仏告阿難譬如世間貧窮乞人在帝王辺、形貌容状寧可類乎、…無以為喩、百千万億不可計倍…	阿難、譬如下a賤半挓b迦人、〔対於輪王…〕	阿難陀、譬えば…卑小者不能男は〔転b輪王の前には…〕	〔正12323a〕復次阿難、譬如有a人、少有財宝、対受灌頂位刹帝利王、所有威勢、悉皆不現
III a 仏語阿難、如世間貧窮乞丐人令在帝王辺住者、其人面目形貌、何等類乎…不如帝王面目形類殊好、百千億万倍也…	—〔帝王因果の説明〕—	対於輪王…	転輪王の前には	又刹帝利
b …如帝王雖於人中好無比、当令在遮迦越王辺住者…	…計如帝王雖人中尊貴形色端正、比之転輪聖王…	又如c帝釈方d第六天…	…d他化自在天の前には	…c対天帝釈…d対他化自在天
c …第二忉利天帝釈辺…	…比忉利天王…			
d …第六天王辺…	…比第六天王…			

e	…無量清浄仏国中諸菩薩阿羅漢辺…	…比無量寿仏国、菩薩声聞光顔容色、不相及逮、百千万億不可計倍		
Ⅳ			彼国有情猶如他化自在天王d	諸天の帝たる楽迦羅c も…
				楽有世界の諸人は此中の他化自在の諸天d の如しと観るべきなり
Ⅴ	仏言、無量清浄仏諸菩薩阿羅漢面貌悉皆端正、絶好無比、次於泥洹之道也			…他化自在天等、及色無色界一切威勢対無量寿如来極楽国土、悉皆不現e
				如是、彼土功徳荘厳不可思議

て、この一段の本旨たる「殊好無比」の一点だけを残し、かの乞人帝王喩だけで十分その趣意は尽きるとみたのである。しかもその「殊好無比」が、他本のように、化生者に関してではなくして、「彼の土の功徳荘厳」一般のこととして述べられていることは注意すべき点で、ここには、明らかに、厳経本編者による質的変更が認められる。このことは『厳経』の性質を見定める上に大切な視点を提供していると思うが、いまは厳経本がいかにこの一段の諸項を省略簡素化しているかを確認できればよい。

三　「乞人帝王喩」について

諸本共通の「乞人帝王喩」を対比することによつて、覚経本→厳経本の省略簡素化が一層明確となるであろう。『覚経』では、乞人→帝王→転輪王→忉利天王→第六天王→浄土の菩薩・声聞の順で六段の対比を煩わしく述べ、『寿経』も同じであるが、『如来会』になると、乞人→転輪王と帝釈→第六天王＝往生人との二種の対比を示すに止る。『梵蔵』でも同じである。『如来会』等のこの対比は、本旨の発揮という点からは甚しく拙劣である。そこで『厳経』では、少有財宝人→帝王→忉利天王→第六天王→極楽国土として一応『覚』・『寿』の原形に戻した。しかしここで『厳経』が、「乞人」を「少有財宝」人と改めたことは、いまの場合注意に値する

ことで、それは恐らく、帝王の威勢の勝れていることを、一般人に、より強く印象づけようとした修辞的技巧であろう。かような仔細な点にも『厳経』の本旨発揮という性質が窺えると思うが、とにかく『厳経』は『如来会』や『梵蔵』のような、趣旨の不明瞭を避けつつ、この一段の本旨をよりよく発揮しようとして、『覚』・『寿』の原形に立ち還ったと解すべきであろう。

なお、右のⅢ喩のaの最後に出る「帝王因果」の説明は、『大阿』にも出て古い三本に共通するが、すでに学者の指摘の通り、甚しく前後の調和を破る文章である。恐らく経本成立当初のものでなく、編者又は訳者当時の歴史的背景と彼らの政治的関心を反映すると思うが、この一段を『如来会』以下の諸本がみな省略していることも、後に至るに従つて本旨の発揮ということに留意していることの一証左といえよう。

四　第二例

省略簡素化のいま一つの例証を、67行業之地の一段にとつてみよう。

第二例〔67行業之地の項〕

	覚経	寿経	如来会	梵蔵本	厳経
Ⅰ	〔正12 291 a〕阿難、長跪叉手問仏言、仏説無量清浄仏国中、無有須弥山者、其第一四天王、第二忉利天、皆依因何等住止乎、願欲聞之	〔正12 270 a〕爾時阿難白仏言、世尊若彼国土、無須弥山、其四天王及忉利天依何而住	〔正11 96 c〕阿難白仏言、世尊、其四天王天・三十三天、既無諸山依何而住	〔荻原訳 p.85〕是の如く語られし時、具寿阿難陀は世尊に白して曰く、世尊、妙高(山)の傍に住する四大王衆の諸天、或は妙高(山)の頂に住する三十三(の諸天)は何の処に住するや。	〔正12 322 b〕爾時阿難、聞是語已、白世尊言、四大王天・忉利天、依須弥山王住、夜摩天等当依何住
Ⅱ	仏告阿難、若有疑意於仏所耶、八方上下無窮無極無有辺幅、其諸天下大海水一人升量之、尚可枯尽得其底 仏智亦如是、八方上下無窮無極無有辺幅…… ―〔仏智無辺の説明〕―				

Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ
仏言無量清浄仏国、無有須弥山者、亦如是、第一四王天・第二忉利天、皆自然在虚空中住止、無所依因也	仏語阿難、第三燄天、乃至色究竟天、皆依何住、阿難白仏、行業果報不可思議	……仏智慧終不可斗量尽也 ……阿難白仏言、我不敢不疑意於仏、所也、所以問仏者、他方仏国皆有須弥山、其第一四王天・第二忉利天皆依因之住止、我恐仏般泥曰後、儻有諸天人民、若比丘僧・比丘尼・優婆塞・優婆夷、来問我無量清浄仏国、何以独無須弥山、其第一四王天・第二忉利天、皆依因何等住止乎、我等応答之、今我不問仏者、仏去後、我当持何等語、答報之乎、独仏自知之耳、其余人無有能為解之者、以是故問仏耳 仏言阿難、汝言是也、第三焔天第四兜率天、上至第七梵天、皆依因何等住止乎、阿難言、是諸天皆自然在虚空中住止、無所依因也
仏語阿難、行業果報不可思議、諸仏世界亦不可思議	仏告阿難、於汝意云何、妙高已上、有夜摩天、乃至他化自在天、及色界諸天等、依何而住、阿難白仏言、世尊不可思議業力所致	「阿難陀曰く、世尊、我は此について何の惑も猶予も疑もあることなく、唯我は未来の諸有情の惑、猶予、疑を除滅せんが為めに如来に此の義を問いたてまつるなり、世尊曰く、善哉善哉、阿難陀、是の如きは汝の当に作すべき事なり。」（Ⅶの後） 世尊曰く、阿難陀、云何に汝は思うや、此処にて妙高山王の上の夜摩天、覩史多（天）、化楽（天）、他化自在（天）、梵衆（天）、梵輔（天）、大梵（天）乃至色究竟天は何の処に住するや、阿難陀曰く、世尊、業の異熟、業の所作は不思議なり。
	仏告阿難、夜摩・兜率、乃至色・无色界一切諸天、皆依空界而住、阿難白仏、空界無碍云何依住、業	「世尊、我今於此法中、実無所惑、為破未来疑網故、発斯問」（Ⅵの後） 「阿難白仏、我不疑此法、但為将来衆生、欲除其疑惑故、問斯義」（Ⅵの後）

Ⅵ				
仏言、仏威神甚重、自在所欲、作為意欲、有所作、不予計也、是諸天皆常自然在虚空中住止、何況仏威神尊重自在所欲作為乎	其諸衆生功徳善力、住行業之地、故能爾耳	仏語阿難、不思議業、汝可知耶、答言不也、仏告阿難、諸仏及衆生、善根業、力汝可知耶、答言不也	世尊曰く、阿難陀、此処に汝は業の異熟、業の所作の不思議なることを会得せり。	因果報不可思議 仏告阿難、汝身果報亦不可思議、衆生業報亦不可思議、諸仏聖力不可思議
Ⅶ				
阿難聞仏言、則大歓喜、長跪叉手言、仏智慧、知八方上下去来現在之事、無窮無極無有辺幅、甚高大妙絶、快善極明、好甚無比、威神尊重不可当也	（「Ⅲ」）	（「Ⅲ」）	諸仏世尊の不思議の神通と加被とを会得せず、併ら彼処にては善根を植え福を作りたる有情の福力は不可思議なり。	（「Ⅲ」）

この一段は、初期二本では国土成就（29～54）の後の衆生成就（55～78）の中頃に突如として出るが、後期五本では国土成就中の30無須弥山に続いていて極めて自然である。これは寿経本またはそれ以前に整理されたものであろう。

初期二本は、Ⅰの「依何而住」という阿難の問に仏は直ちに答えずして、「仏所に疑う意有りや？」と反問した上、仏智の「無窮無極」がながながと説かれる。阿難は、「仏所を疑う意」はないが、滅後の衆生の疑惑を除くために問うた、と答える。

何かの纔入かとも疑われるこの長い問答の後、仏は最初の阿難の問に答えられる。「皆自然に虚空中に在りて住止し、依因る所は無」い、と。こうして一応本題は終つたかと思われるところへ、さらに仏の言葉として「仏の威神は甚だ重し。……」と告げられ、阿難は仏智の「無窮無極……」を述べてこの一段が終る。

右の叙述は、たしかに読む者をして、一段の本旨が奈辺にあるかに惑わしめる。「依何而住」と「仏智無窮」とは一体どう関連するのであろうか？

ところが『寿経』以下諸本になると、右の不明瞭さはすっかり除かれて、「行業果報の不思議」という一線で貫かれている。仏智威神力についてのながたらしい問答（Ⅱ）は削除される。寿経本の編者あたりが、この一段の本旨を明確にするために採つた大胆な削除省略である。

右の対照表によつてこの削除省略を跡づけるとき、読者

は、『寿』→『如』→『梵蔵』→『厳』の順に、次第にその表現が洗練され簡素化せられていることを諒得されるであろう。

要するにこの一段の本旨は、『厳経』がもつとも簡明に述べているように、「業因果報の不可思議」によつて、四天王天・忉利天の住止を説明するにあるといえよう。

それでは初期二本に出る、仏の智慧・威神に関するながながしい問答は、果して無関係であろうか？　私は〝否〟と答えざるを得ない。

仏が阿難に、「仏所に疑う意ありや？」と問い、阿難も「敢て仏所に疑う意あらず。」と答える間で、「仏所」と「仏智」とが並べ挙げられていることに注意したい。これら両者は実は同一のものとみざるを得ない。「仏所」とは「仏所居の土」のことで、それは「仏智」の感受する世界（境涯）をあらわし、「仏の威力」に支えられた境涯と受け取られる。そうみるとき、ここの文章の続き工合はよく理解できるのではなかろうか？　仏の境涯、すなわち仏所居の土たる浄土は、仏知見の境涯であるから、仏智不思議に対する受容―信仰―さえあれば、その四天王天や忉利天の存在についても疑いの起きる筈はない、というのがこの問答の趣旨であろう。

『大阿』や『覚経』が、「諸天は皆自然に虚空中に在りて住止す」といつたのを、『寿経』等が「行業果報不可思議」等と云い変えたのは、「自然」が「業道自然」を意味していることを明確にしようとしたもので、本旨をよりよく発揮しようとした意図がここにも窺われる。仏智とその所見（〝所居〟と申してもよい）の浄土とは、固より菩薩清浄業因の所感であるから「不可思議業力の所致」・「業の異熟」・「業の所作」・「業因果報の不可思議」等といわれてよいし、『大阿』や『覚経』が「威神（力）」と呼んでいるのも、結局はこの仏智力を意味している。『梵蔵本』では「神通（力）と加被（力）」又は「福力」といい、『厳経』では「聖力」として簡明に表現したのである。

初期二本に出る「仏所」・「仏智」に関する問答は、以上のように理解してはじめて自然なものとなるであろう。しかし始めてこれに接する者に取つては、何といつてもあの表現では途惑いせずにはいられない。そこに気附いた寿経本等の編者が、あの問答の一段を削除したことは、極めて至当であつた。あの問答がなくても、一段の趣旨は十分いい尽されているからである。

五　結　語

以上ほんの二例を示したに過ぎないが、われわれは同じような例をこの経の到る処に発見できるであろう。例えば5出世本懐の段・54供具如意の段・71三輩往生の段・78菩薩心徳の段等はその顕著なものといえよう。

蘭田香勲氏が『厳経』上位説を証明するために提示せられた七例をみても、第一例以外は、丁度逆の順位とみて一向に不自然でないと思われるものばかりである。

数字の羅列を対比せられた第一例だけは、確かに『厳経』上位とみられる可能性があるが、これとても、前期二本にもともと数字の羅列はなく、しかも叙述は極めて冗長で、大目犍連を引き合いに出す意味や「沾取一渧の喩」の用法などが、諸本と異つていることを考え合せると、寿経本等でこの一段の根本的改変を行つたとみるべきで、その場合、羅列される数字の如きは、極めて末梢的な問題であつたのではなかろうか？『寿』・『如』両本が煩わしい数字の羅列を避けたのは、むしろ要旨を外さないための配慮からであろう。数字の部分だけで判断すれば、一応『厳経』が複雑なといえるが、実はその部分だけでなく、前後の文章全体を比較してみると、経本成立はやはり、『覚』→『寿』→『如』→『梵蔵』→『厳』の順位とみてよかろうと思われる。

〔昭47・9・20〕

執筆者紹介（四）

渡辺守順（能登川高校教諭）
木内央（大正大学講師）
初崎正純（京都文化研究所所長）
松崎恵水（大正大学講師）
栗山秀純（大正大学講師）
羽塚堅子（同朋大学教授）
奈良弘元（日本大学講師）
八田幸雄（三国丘高校教諭）
日野西真定（高野山大学助手）
中山正晃（竜谷大学講師）
石井修道（駒沢大学助手）
大谷哲夫（曹洞宗宗学研究所所員）
中川孝（東北薬科大学教授）
椎名宏雄（曹洞宗宗学研究所所員）
佐藤心岳（仏教大学助教授）
近藤良一（駒沢大学助教授）
青木孝彰（早稲田大学大学院）
木村清孝（中央大学講師）
滋野井恬（大谷大学助教授）
福田亮成（東洋大学東洋学研究所研究員）

（八三頁につづく）